蚊帳を吊るころ

天理参考館学芸員
幡鎌　真理 *Mari Hatakama*

今年もやっぱり暑い。５月半ば過ぎ、参考館では五月人形と入れ替わりに蚊帳を展示した。「まだ少し早いか…」と思っていたのが嘘のように、奈良県では梅雨明け前にすでに猛暑日が連続している。蚊帳は網戸が十分普及していない頃の家屋で、蚊などの虫を防ぐために室内に吊した夏の風物詩だ。夏の暑さに耐え、寝苦しい夜をやり過ごすために、窓は全開にして風を取り入れなければならなかった時代の必需品だった。窓を全開にするなんて不用心極まりなく、熱中症を防ぐために就寝時もクーラーをつけるべきだと、今なら叱責されるところだろう。しかし、アメリカで最初の電気式エア・コンディショナーが発明されて今年でまだ 122 年にしかならない。日本では古代から昭和 40 年代まで、蚊帳は扇風機と併用しつつも現役で活躍していた。スタジオジブリ制作の『となりのトトロ』にも登場しているではないか。

「ああ此の物や吾人の安眠を保護するの小碧城なり、三伏の節、城市の中なほ此の無紋の地あり。涼風粋さい（糸へんに蔡）のところ枕を高うして梧桐葉上の月を観る。豈亦快ならずや」とは唐代の流麗な漢詩かと思うが、明治 22 年に創刊された『風俗画報』93 号（明治 28 年）に編集長の山下重民が書いた記事である。大げさに賞賛されている「此の物」こそ蚊帳である。近年は環境衛生の向上で蚊に刺されることは少なくなったが、当時は夏の夕方に外で立ち話をしていると、蚊が口の中に入ってくるほどだったらしい。

蚊帳の歴史をひもとくと、８世紀初めに編纂された『播磨国風土記』に、応神天皇が飾磨郡賀野里（かやのさと）で御殿を建てて蚊屋を張ったため賀野という地名になったという記述が見られる。『日本書紀』にも、応神天皇のころ呉から蚊屋衣縫という女性の技術者が渡来したとある。賀野里にあたる場所は、現在の姫路市夢前町の東北部、旧鹿谷村付近であろうと考えられる。鹿谷は奇しくも同じ読みである。このあたりは夢前川が中央部を南流し、南端には山崎断層が東西に貫いて、古来播磨内陸の交通路として利用されてきた。今は中国自動車道がこれに沿って走っている。応神天皇が通ったという所伝もさもありなんと思え、天皇が伊弉諾・伊弉冉二神のために社殿を建立した伝承の賀野神社が今も残る。ともかく、蚊帳は舶来の贅沢品である。平安時代までは、文献上「蚊遣」の言葉は出てくるが、蚊帳はほとんど現れない。貴族の邸宅では帳台が蚊帳の役目を担っていたのだろうが、蚊帳は奢侈に過ぎ、蚊遣火をたいて我慢していたと考えられる。庶民なんぞ蚊の格好の餌食だった。蚊帳の記録が出てくるのは室町時代あたりからで、貴族や武士の間で贈答品として珍重されるようになり、奈良が蚊帳の産地となってきた。当時の素材は生絁で、７尺四方の正方形に縫い、上辺に乳を付けて四辺に竿を通して天井から吊った。天蓋ベッドの周囲を囲むカーテンのようなイメージだろうか。大仰な構造なので毎日取り外すのではなく、昼間は蚊帳の裾をたくし上げて竿に掛けた。この構造物は４月から８月末まで取り付けられたが、宮中ではいつ設置して撤収するかは陰陽師が祈禱して吉日を選んだ。戦国時代になると、いよいよ麻の蚊帳が誕生する。奈良に加え、近江が麻糸産地の越前と結んで一大産地として成長した。近江八幡の蚊帳問屋は、近在の農村の女性に副業として織らせ、出来上がった蚊帳を紺屋で染めて大坂や江戸に送る。都市部の問屋はこれを行商人に売らせた。「かやー、かやー」と独特の節回しで声高に売り歩く蚊帳の行商人は、真っ黒に日焼けしているのがトレードマークだった。蚊帳が普及するにつれてゴージャスな天蓋ベッド風のつくりは改良され、四隅に付けた環の吊り手のおかげで毎日簡単に吊り外しができるようになった。江戸時代に、近江蚊帳問屋二代目西川甚五郎が萌黄染で茜縁の麻蚊帳を発明すると、汚れが目立たず華やかで涼しげな色使いが大評判となって、ほぼ市場を独占した。現在の西川である。先述の『となりのトトロ』に描かれた蚊帳も全く同じ色調だった。江戸時代でも蚊帳は高級品だったので、庶民は和紙を貼り合わせた紙帳を用いた。少しでも涼しく見えるよう白紙に墨絵を描いたり、ところどころ扇形に切り抜いて紗を貼り付け、風を通そうと涙ぐましい工夫をしたようだが、所詮は通風性のない紙で暑苦しかったらしい。紙衣や、紙の布団皮の中に藁を詰めた紙布団もあったので同じ発想だろう。現代では暑そうに見える蚊帳だが、それも持てず、蚊との戦いでともかく早く寝てしまうしかなかった人たちからすると、先の山下重民の言ではないが、萌黄色の「小碧城（＝蚊帳）」の中で「枕を高うして」「安眠」できるのは「三伏（＝酷暑）」のころには決して大げさではなく極楽だったのである。気象庁による「暖候期予報」では、2023 年も暑い夏になりそうだ。展示中の蚊帳を見ることで、現代に生きるわたしたちが享受する快適さと比較し、ちょっと昔の時代に生きた人びとの苦闘と工夫に思いをはせていただければ幸いである。

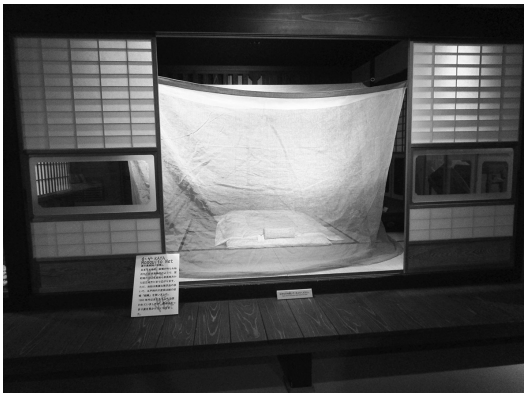

図１　蚊帳 奈良 昭和時代 高 189.3cm〈天理参考館蔵〉

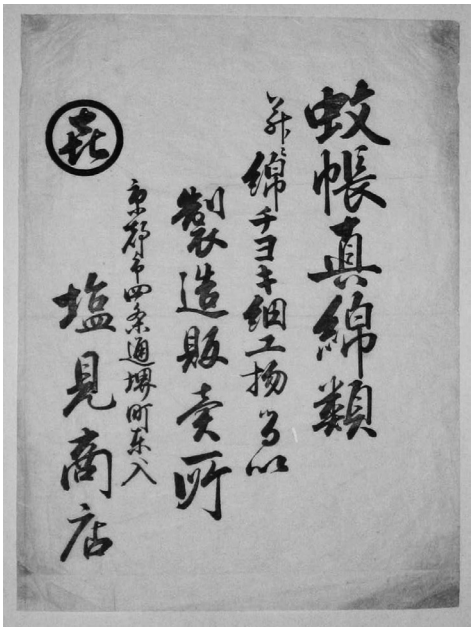

図２　蚊帳真綿類製造販売所引札 京都 明治時代 33.0 × 24.5cm〈天理参考館蔵〉
蚊帳の宣伝用にふさわしく涼しげな藍色で刷った引札